



Column

地域連携からの想い

竹ノ内 徳人

人事交流の一環で愛媛大学農学部から本年4月1日付で着任いたしました。主な研究分野は水産経営・経済学、最近は地域連携やビジネス論に力を入れている。

昨年の今頃、大学の組織運営、就職指導、週6コマの授業、遅々と進まぬ卒論指導と、多忙な日々をおくっていたことを思い出す。政策研で研究三昧の日々を思うと、このご縁に感謝せずにはいられない。この場をお借りして大学での活動を振り返り、政策研での抱負について綴ってみたい。

大学での活動を振り返れば、研究はもちろん、他に教育や地域貢献などが強く求められていた。この背景には100%大学全入時代の到来にともなう大学間競争の激化、勝ち残りへの魅力ある大学づくり・教育カリキュラム、学生や地域社会の高度化・複雑化するニーズ、などに応えていく必要があるからであろう。

これらに対応する取り組みの一つとして私たちの研究グループは、昨年度から愛媛県南部地域の小学校を対象に、地物の水産物を通じた食育研究を「ぎょしょく教育」というテーマで実施している。一般に食育は栄養学や家庭科的なものと考えられがちであり、また水産物の販売促進の意味合いが強い「魚食」であることが多い。対して私たちの取り組みは、総合学習的に「魚を見て、触って理解し、そして食べる」という五感を大事にしながら、「地域」の視点を取り入れていることに特徴がある。ゆえに「魚食」の部分が多様な捉え方が出来るようにあえて平仮名にしているのである。今一つは、地域にあるリアルな材料・人材を活用しながら総合的な授業

を実践することによって、地域の水産業を見直し、地物の水産物を再評価するという地域資源化をも視野に入れていることである。

さて、この取り組みには、地元の小学校、食育研究のボランティアグループ、行政（水産、教育）、地域漁協などとの連携によっている。小学校という場の提供、食材としての地物水産物の提供、地元の有志達との調理実習。私たちはそれぞれの役割分担のもとで、小学生（高学年）相手に地域漁業の概要、魚の種類や流通、魚のさばき方・食べ方、伝統料理などを授業形式で実践している*。

この授業では、小学生らしく舌足らずな言葉遣いながら活発で斬新な質問に驚かされ、調理実習中には感嘆の声があちこちからあがる。そして専門用語に頼りきっている現状を反省しながら、いかに子供達に理解してもらうのかを工夫することに教育の楽しさを実感することもしばしばである。そして近い将来、この授業を受けた小学生達が愛媛大学農学部の門を叩く日が来ることを密かに願っていたりもする。

これらの詳細な成果については割愛するが、総じていえば地域貢献や産学官連携の基盤となり、地域への誇りと愛着を再確認してもらえるきっかけになったことである。もちろん、これらは地域の協力があってこそその成果なのだが、この背景には地域の過疎化・高齢化、地域漁業の衰退など、何らかの危機感や焦燥感があることを見逃してはいけない。

ともすれば水産物の自給率向上、輸入問題などの大きな政策論としての話になりがちであるが、実はもっと足下の取り組みを支援し、地域固有の実情を受け止めた施策・政策を実現していくなど、ボトムアップの仕組みを考える時期に来ているのではなかろうか。行政施策・政策に反映されるであろう、私たちの研究成果としてのアウトプット一つ一つが、ひいては地域漁業ならびにそこに住む人々の生活に直結している、ということを肝に銘じながらこの1年間を頑張りたい。

*この活動は『平成18年度版 水産白書』の「トピックス～水産この一年～（3ページ）」に掲載予定。